

# ごごみ日和67

特集：“ごみゼロ”を目指す四国の小さな町の大きな挑戦  
—34 分別で“ごみ”を“資源”に—  
NPO 法人 ゼロ・ウェイストアカデミー

ごみ減会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」:

社会福祉法人 嵐山寮さん

グリーンキーパーがゆく：小学生のごみ処理施設見学から見た新事実  
大阪産業大学 人間環境学部生活環境学科 花嶋 温子 先生

なごみ日和：京都マラソン 2016

KBS 京都 アナウンサー 海平 和



京都市ごみ減量推進会議 HISTORY2：  
BDF 事業へ貢献しながら  
地域ごみ減量推進会議も拡大へ

地域活動レポート：地域住民が環境意識に目覚め自主的に活動  
～北白川ごみ減量推進会議～



ごみも大切な資源——を合言葉に  
34種類の分別を实践

“ゼロ・ウェイスト宣言”の  
上勝町のごみステーション

「34分別はたいへんでは？」と問うと  
「慣れてしまうと分別しないと気持ち悪いわ」  
町民の笑顔が返ってきた

写真 藤原幸子

ごみにまつわるこの数字なあに？

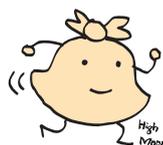
使っている人が**99%**

答えはWebへ！

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」  
をご覧ください。

「ごごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、  
京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。

最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手をとりあって ごみを減らそう！  
京都市ごみ減量推進会議

🔍 ごみ減 🔍 検索

## “ごみゼロ”を目指す 四国の小さな町の大きな挑戦

### —34分別で“ごみ”を“資源”に—

NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー 理事長 坂野 晶さん

徳島県の山あいにある小さな町、上勝町。人口1700人足らず、町にコンビニはなく、信号は1ヶ所だけ。過疎と高齢化が同時進行するこの町が、2003年に日本で初めて『ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）宣言』を出して一躍有名になりました。今や国内はもちろんのこと海外からも視察や取材が後を絶たないといえます。未来の子どもたちに美しい故郷を残したいと、2020年に向けて「ごみゼロ」への挑戦を続ける上勝町の取組に迫りました。



#### ごみ収集車が走らない町

徳島駅から車で約1時間、県のほぼ中央に位置する上勝町。人口は1696人（2015年12月現在）、その過半数が65歳以上だ。四国で最も人口が少なく、過疎と高齢化が進むこの小さな町が注目を集める理由の一つが「葉っぱビジネス」。料理に添える“つまもの”の生産販売で高齢者が活躍している、といえばピンとくる人も多いかもしれない。そして、もう一つが町ぐるみで推進する「ごみゼロ」への取組だ。

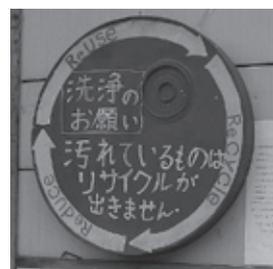
同町は2003年9月、日本で初めて『ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）宣言』を行った。次代を担う子どもたちにきれいな空気や豊かな大地を継承するため、ごみの再利用・再資源化を進め、2020年までに埋め立て・焼却処分をなくすことを目指している。

#### 焼却・埋め立てに頼らないごみ処理

かつて同町ではごみを「野焼き」していた。町内に掘った大きな穴に何でも持ち込んで焼却し、立ち上る黒煙や悪臭に周辺住民から苦情が絶えなかったという。98年に設置した小型焼却炉も、2000年ダイオキシン類対策特別措置法の施行に伴い、閉鎖を余儀なくされた。新たな処理施設を作るには、場所の選定、自然・生態系への影響調査など難問が立ちちはだかる。なにより、町には新しい焼却設備を導入する財政的余裕はなかった。そこで、ごみ処理の仕組みそのものを変えることに。生ごみは各家庭で堆肥化し、それ以外のごみはリサイクルで脱焼却、脱埋め立てを図った。アルミ缶、スプレー缶、蛍光灯…と個別の引き取り先（リサイクル事業者）を確保した結果、分別は34種

「外から来られた方は、ごみ収集車が走っていないことに驚かれるんですよ」と語るのは、今回お話を伺ったNPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー（以下、ZWA）の理事長・坂野晶さん。ZWAは上勝町と協力し、ごみステーションを拠点とした3Rの推進活動を展開している。

ごみ収集車のない町でのごみ処理は——。生ごみは畑に埋めるか、町からの補助を利用して、各家庭にコンポストや生ごみ処理機を導入し、堆肥化あるいは土に還している。生ごみ以外のごみは、町内の「日比ヶ谷ごみステーション」に各自が持ち込み、34分別している。なぜこんなに細分化する必要があるのだろうか。



類に。細分化して各引き取り先と連携することでごみを“資源”として再利用できるのだ。

同時に、町民によってごみをステーションに持ち込み、各自が分別する仕組みを作った。ステーションは、毎日7時半から14時まで開いており、都合の良い時に利用できる。分別スペースには箱がずらりと並び、誰でも簡単に分別できるよう番号やイラストでわかりやすく表示。「金属製キャップ→建築用資材」「紙パック→トイレトーパー」など、各資源がどう活用されるのかも併記されている。また、新聞紙10円、牛乳パック7.5円など、1kgあたりの売払い価格表を掲示して、分別したごみが資源になることを具体的に伝えている。また、車を所有しない高齢者世帯などには、2ヶ月に1度戸別収集を実施している。

始めは町民もごみの細分化に戸惑いがあり、「年寄りいじめだ」という声まで上がった。しかし当時の町の職員が

「未来の子どもたちに美しい上勝を残そう」と説得を重ね、徐々にごみや環境への関心が高まり、理解・協力が得られるようになった。取材中にごみを捨てにきた町民に「分別

は大変では？」と問うと、「もう慣れました」「分別が当たり前になっているから別に負担に感じない」と。

## “ごみ” と呼ばれた不要品を “資源” に

ステーションに持ち込まれる不要品の中には、家具や衣類、食器などまだ使えるものも数多い。ステーション内には、そうした“再利用可能なもの”を陳列する「くるくるショップ」が併設されている。ショップに並んでいるものは、欲しい人が自由に持ち帰ることができ、町内外の人に広く利用されている（持ち込みは町民のみ）。年間約10トンの持ち込み、約9トンの持ち帰りがあり、ごみの減量に貢献している。持ち込み、持ち帰りともに、年々量は増加しており、意識の高まりが感じられる。

また、衣類や布類のリメイクもごみ資源化の一例だ。ステーションと隣接する介護予防活動センター内にある「くるくる工房」では、町のおばあちゃんたちの手で、不要になった着物やジーンズの生地などを活用した様々なリメイク品を製作・販売している。中でも、鯉のぼり生地を活用

したパーカーや、和布のテディベアは好評で、オーダーメイドの注文も来ているとか。収益は製作者にも還元され、ごみの減量と同時に、作り手の生きがいにもなっている。



また、子どもたちにとっては、こうした町の様々な取組や、自らの手でごみを分別する作業が、“ものを大切にする”という意識を高め、絶好の環境学習の場になっているという。

私たちが“ごみ”として捨てているものの中にも、まだまだ使えるもの、資源となるものがたくさんある。分別でごみが資源に生まれ変わる——日々の生活で一人ひとりがそう意識するだけで、ごみ排出量の抑制や、循環型社会の形成に大きく貢献するだろう。

## ゼロ・ウェイストに向けた新たな動き

「ゼロ・ウェイストとは、単に“ごみをゼロにする”ということではなく、そもそもごみを出さないような環境づくりが目標です。浪費や無駄をなくし、生産段階から処理に困らない製品をつくるということまで目指しています」と坂野さんは言う。

2年半前に町内にオープンしたカフェ「ポールスター」では、ゼロ・ウェイストの観点から店づくりを行っている。建物は高気密・高断熱な造りで、冬季は薪ストーブを使用。地元食材でつくるメニューはできる限り皮のままを心がけている。その他、紙ストローの使用、生ごみの堆肥化、お手ふきは出さずハンカチ等の持参を呼びかけている。また、昨年6月には、本来破棄する上勝特産の柑橘ゆこうの皮を使ってクラフトビールを醸造する「RISE&WIN Brewing Co. BBQ & General Store」が誕生。印象的な外観には、ごみステーションで調達した窓枠を多数活用。内装にも机や棚、空き瓶など廃材を活かした造りになっている。前身は量り売りの専門店として有名だった上勝百貨店。容器持参を推奨していて、量り売り商品の販売や、新聞紙で作った紙袋の使用などコンセプトは引き継がれており、繰り返し使えるリターナブルボトルも導入。ごみを出さない実践の場

のひとつである。そして、どちらのお店も1ターンやUターンの若い世代が担っており、国内外から取材にきた人がランチや喫茶で店を迷うほど、魅力的な店が増えている。ゼロ・ウェイストに取り組む町民の努力が町の魅力となり、若い世代を引き寄せ、さらに魅力的な上勝を作っている。そんな循環も見えてきた。今後の展開として、「町外の企業や団体と協力して、包装を省いた商品の開発などにも携わっていきたい。そのしくみの一つとして、ゼロ・ウェイスト商品の認証制度なども考えている」という。

「町民にとってゼロ・ウェイストが分別など『やらなくてはいけないこと』だけに留まってはいけないと思っています。」紙を売却した収入など年間250万円ほどあり、それをどう還元していくかが目下のテーマの一つ。「皆さんの意思が反映できるものにしたいですね。今後は、上勝町という小さな町だけではなく、日本中、世界中に仲間を作り、ゼロ・ウェイストの取組を広げていきたいです」。目標に定めた2020年に向けて、四国一小さな町のゼロ・ウェイストの挑戦は続いていく。



カフェ・ポールスター。小さな、あたりまえの、環境を思う気持ちを思い出させてくれるカフェ。

### 取材にご協力 いただいた方

- NPO法人ゼロ・ウェイストア카데미理事長 坂野晶さん  
TEL : 0885-44-6080 <http://www.zwa.jp/>
- RISE&WIN Brewing Co. BBQ & General Store  
マネージャー 新居章央さん  
TEL : 0885-45-0688 <http://www.kamikatz.jp/>

- cafe polestar / カフェ・ポールスター  
店主 松本卓也さん、東輝実さん  
TEL:0885-46-0338 <http://cafepolestar.com/>
- 農家民宿「山挨拶」女将 岸里枝さん  
TEL : 0885-46-0356

藤原幸子（平成27年11月25日取材）



## 介護サービスの質が上がれば、 環境負荷も低減できる！



第13回京都環境賞・特別賞「市民活動賞」受賞  
社会福祉法人 嵐山寮

2015年12月、京都市が環境保全を目的とした先進的な活動に取り組む個人や団体を表彰する、第13回京都環境賞の受賞者が発表されました。そこで特別賞「市民活動賞」に輝いたのは社会福祉法人 嵐山寮。福祉団体では初の受賞として注目されました。選考の過程で評価されたのは「介護サービスの質的向上が、環境負荷の低減につながる」という斬新性。人手と時間を要する高齢者介護の現場で、どのような取組が行われているのか。環境管理責任者の加藤友孝さんに、今回の受賞に至るまでを振り返っていただきました。

### 観光名所・嵐山の中心に福祉60年の歴史

社会福祉法人 嵐山寮は昨年、創立60周年を迎えました。京都市内でも長い歴史をもつ養護老人ホーム嵐山寮と、特別養護老人ホーム嵐山寮を本拠地としていますが、その立地の贅沢さには驚かされます。名勝嵐山の渡月橋から天龍寺に向かう観光メインストリートに面して門があり、建物の屋上は五山送り火「鳥居形」を目の前にする絶好の観賞スポット。嵐山地区でも得がたい眺めといえそうです。とはいえ、通りから奥まった施設は、観光客の人波とは無縁の静けさ。この嵐山寮を中心に、現在は「ひろさわ」、「さかの」、「うたの」と風光明媚な歴史地区に四拠点もち、施設サービスから在宅サービスまでの高齢者介護事業を展開しています。

近年、日本各地で頻発する豪雨被害。地球温暖化が一因ともいわれていますが、嵐山も例外ではなく、渡月橋周辺では浸水被害が続きました。こうした変化は、日々多忙な介護現場でも環境問題を切実に考えるきっかけとなりました。ちょうどその頃、京都発祥の環境マネジメントシステム「KES」を福祉施



左は天龍寺、通ったことのある場所ですね

設にも広めたいとの提案を受けました。安全衛生委員の加藤さんは、京都での学生時代に環境問題を学んだことから、地域に密着した嵐山寮にはKES導入がふさわしいと考えました。

### 環境マネジメントシステム“KES”導入をきっかけに

嵐山寮がKESに取り組み始めたのは2014年1月です。この取組は拠点ごとに行います。職場が分散する300名以上の全職員にKESとは何か、どういうシステムで行うのかを周知する必要があります。環境管理責任者となった加藤さんは、決して急がず、じっくり取り組む覚悟を決めました。介護の現場は多忙ですから「新たな仕事が増える」と職員に受け取られたの

では、この取組は成功しないだろう、職員が負担を感じない取組とするにはどうすればいいか。計画書をつくる段階で、これが最大の悩みだったそうです。

そこで1年目はわかりやすさを第一に「ムダをなくす」のテーマのもと、(1)紙の使用量削減、(2)電気の使用量削減、(3)周辺清掃という三つの環境改善目標に決めました。

## 本業の改善に取り組み、それが環境負荷削減になる、という発想

「1年目の改善目標(3) 周辺清掃の取組が発想の転換点でした」と加藤さんは振り返ります。環境活動として特別なことを始めなくても、業務の中に環境への取組につながるテーマがあると気づいたのです。嵐山寮で取り組んでいる周辺清掃は、5S(整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)を基本としています。職場に5Sのポスターを貼り、職員への周知・徹底もはかっています。これこそ環境改善の活動なのだから、職員は与えられた業務としてこなすのではなく、自分たちも環境活動に貢献しているという意識をもつことで、KESの活動に組み入れることができるはずでした。

環境活動は、実は自分たちの身近にあり、法人の経営理念や基本精神とも合致する、という気づきが、発想の転換につながっ

たといえます。ということは、“ご利用者の為に取り組むことが、環境や社会の為になる”。環境改善が先にありきではなく、最優先すべきはご利用者の状態改善です。職員が介護に一生懸命がんばるほどに、ご利用者に喜んでいただけ

て、結果として紙おむつの使用や廃棄が減少し、環境負荷はおのずと低減する——これは大きな発見でした。



事業所でのイベントでは、こんなエコステーションが登場

## 介護サービスに“環境”という新しい付加価値を

こうして2年目は、年間テーマをずばり「サービスの質を上げる」としました。環境改善目標は(1)「事故を減らす」——忘れ物や取り違い、報告書作成のミスを減らし、用紙や車稼働のムダを削減する。(2)「トイレでの排泄」——日中おむつ外し、これは従来から嵐山寮が力を入れている介護の重点目標です。

介護の事業所では、介護保険用に作成する書類の量が膨大です。これを1年目は「紙のムダをなくす」、2年目は「報告書作成のミスを減らす」としました。めざすところは同じでも、1年目は環境からの視点、2年目は本業からの視点に変化していることがわかります。

日中おむつ外し。これはご利用者が自力でトイレに行けるよう

機能維持・改善に努め、職員が細やかにサポートする取組です。夜間はおむつが必要でも、日中は職員がトイレ誘導を丹念に行うことで、ご利用者のADL\*向上をめざす。この双方のがんばりによって、紙おむつの使用量・廃棄量を削減できるのです。

1年目が終わる頃には早くも、OA用紙の使用量3万枚以上の削減を実現できました。これはコピーや印刷時の裏紙の使用、両面や集約など印刷方法の工夫、プレビューでの確認を習慣づけた結果です。こうして1年目、さらに2年目と、職員のがんばりが目に見える数字となって表れるようになってきました。

\*ADL(Activity of daily life): 日常生活を送るために必要な基本動作

## 受賞を経て3年目の目標と今後のビジョン

「KESを導入しても職員に負担がかからないようにしたい」との思いから始まった嵐山寮のKES。介護の現場では、全国的に人材不足が深刻化していますが、こうした厳しい現実がなければ、このような発想の転換には至らなかつたかもしれません。そして、まさにその点が評価されての特別賞「市民活動賞」受賞です。さて受賞後の本年3年目は、どんな目標を立てているのでしょうか。

2016年は「ご利用者とともに社会的取組に参加する」——3年目は、リユース食器の導入や割り箸リサイクルなど、外部に存在する社会的資源の活用さらに力を入れていきます。また、葵祭で使われるフタバアオイの植物保全活動に賛同して、

ご利用者とともに施設でフタバアオイを育て奉納する計画も進んでいます。夏の送り火行事(納涼大会)では、鳥居形への護摩木奉納も続けています。こうして地元嵯峨嵐山や京都の伝統行事に参加することが、経営理念にも掲げられている“長寿生活の楽しみ”につながれば、との願いが込められています。環境改善に画期的な視点を投じた嵐山寮の取組には、これからもおおいに注目したいところです。



環境管理責任者の加藤孝さん  
この取材の翌日に第一子誕生、おめでた続きです!

### 「社会福祉法人 嵐山寮」



昭和30年、養老施設壽楽園南寮として開設。創始者は大僧正・亀山弘應院下。  
昭和60年、養護老人ホームに特別養護老人ホームを併設。  
現在は高齢者総合福祉施設として幅広い介護サービス事業を行っている。  
利用定員441名。職員数336名。

〒616-8374 京都市右京区嵯峨天龍寺北造路町17  
電話 075-871-0032 URL: <http://www.arashiyamaryo.or.jp>



## 小学生のごみ処理施設見学から見た新事実 ～大阪のおばちゃん先生の熱い挑戦～

今回は、大阪産業大学の花嶋温子先生に、先生が研究されていることのひとつ「小学生のごみ処理施設見学にみる環境教育の効果」について、お話を伺いました。取材場所は、JR茨木駅の小さな喫茶店。どんな先生なのだろうと、ドキドキしながら待ちました。すると、「おはようございます。よろしくお祈りします！」と、とても明るく優しい表情で話かけてくださった先生。楽しい取材がスタートしました。



### 小学生のとき、ごみ処理工場見学に行ったことがありますか？

だれでも小学生のころに一度は行ったことのある、ごみ処理施設の見学。もちろん、私たちも行ったことがあります。いったいどれくらいの方が、この施設見学に参加しているのか。先生の調査によると、小学生の他、中高生や大人も合わせると、焼却工場だけで年間128万人がごみ処理施設に見学に行っているそうです（2009年度実績）。先生は、「これは、日本が誇る立派な環境教育だ！」と力を込められました。

### 昔から受け継がれてきた環境教育の歴史

文献によると、環境教育の源流は、1950年代からの自然保護教育と1960年代からの公害教育。しかし、当時の日本の環境教育の源流と思われる部分に「ごみ処理施設」は出てこないそうです。小学生のごみ処理施設見学は1970年代から始まり、1977年の文部省学習指導要領の改訂により、1980年から全国の学校で実施されるようになったとか。私たちの生まれるずっと前に決まった教育内容が今でもきちんと受け継がれていることに、とても驚きました。

### 踊るおばちゃん先生

この取材の前に、先生をお待ちしている間、動画投稿サイトYouTubeで、AKB48の「恋するフォーチュンクッキー」や「心のプラカード」の曲に合わせて踊っている先生を見ていました。この動画を制作しようとしたきっかけを伺うと、「自治体や学校で制作したものはあるけど、ごみ処理施設が登場することってないですよ。」「ごみ処理施設で働く人も、私を見て！って思っているんです。」と、ノリノリで説明してくれました。

先生はとてもお若く、綺麗な方なのですが、ご自分のことを「おばちゃん」とおっしゃるで、この記事のタイトルにも、敬愛の意味を込めて「おばちゃん先生」書かせていただきました。もちろん、先生には了承済みです（笑）。



YouTubeの動画「ぜひ、見てください！」

#### 花嶋温子先生

大阪産業大学人間環境学部生活環境学科 講師  
大阪大学大学院工学研究科 招聘教員（平成27年度）  
大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士前期課程修了  
環境省3R推進マイスター、3R・低炭素社会検定実行委員長、  
なにわエコ会議会長



# なごみ 日和



KBS 京都 アナウンサー  
うみひら なごみ  
海平 和

## ●● 第9回 京都マラソン2016 ●●

2月21日、5回目となる京都マラソンが開催されました。毎年番組に関わらせていただく中でランナーの皆さん、ボランティアやスタッフのみなさんに取材し、様々な角度から京都マラソンの魅力を感じさせてもらってきました。そして今年は何となく、ついに！自分がランナーとなり京都マラソンに参加しました！

参加したのは京都マラソンのコースを2人でたすきをつないで走るペア駅伝。1区が西京極陸上競技場から京都府立植物園までの27.6キロ、そして2区が植物園からフィニッシュ地点平安神宮までの14.6キロ。私は女子3000メートル障害日本記録保持者の早狩実紀さんからたすきを受け取り、2区を走りました。

これまで長距離を走った経験のなかった私は、不安だらけでした。そして迎えた当日、植物園でその時を待っている間に、様々なランナーとお話できました。1カ月後にご結婚されるという娘さんと走られるお母さん、夫婦でたすきをつなぐ方、久々に

に地元に戻ってこられた方。それぞれの思いを胸に参加されているようでした。私は何を感じる事ができるんだろう、何がみつかるだろう、そんなワクワクと緊張を抱きながら、かなり早いランナーのグループの中でたすきをもらいました。

走り始めてすぐに聞こえる沿道からの声援。送られる笑顔。ハイタッチ。「足が痛いのは気のせい」「フィニッシュのポーズ決めた？」などユニークなメッセージボード。凜とした空気、京都の町並み…「何これ?!楽しい〜!」気持ちがどンドンあがってきました。給水所ではおいしい水道水だけでなく、優しい一言、笑顔も添えられるので、心まで潤います。そしてランナーの皆さんからも、「頑張りましょう」と声をかけてくださるんです。辛くなつてはあたたかみに触れ、最高の気分で走ることができまし



た。フィニッシュした瞬間の私の一言は「楽しかったぁ」。胸いっぱいのおもてなしのあたたかさ、優しさに出会って、京都のまちがもっと好きになった京都マラソンでした。

海平 和：京都市出身、2010年 KBS 京都入社。テレビ「京スポ」、ラジオ「森谷威夫のお世話になります」など出演中。

## 京都市ごみ減量推進会議 HISTORY

2

当会議は、平成28年11月に  
設立20周年を迎えます。

### BDF事業へ貢献しながら地域ごみ減量推進会議も拡大へ

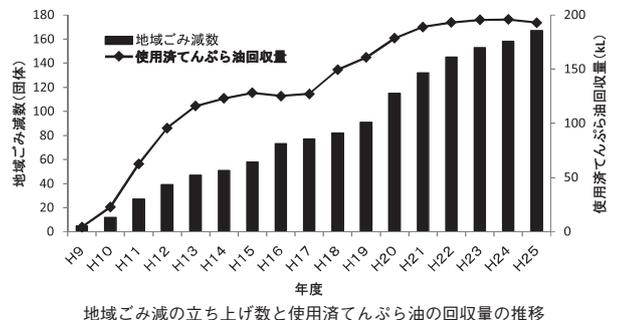
まず、右のグラフをご覧ください。地域ごみ減量推進会議（以下、地域ごみ減）が、いかに京都市のBDF\*事業に協力していたかが見て取れる。市民・事業者・行政の3者で構成される京都市ごみ減量推進会議にとって、地域ごみ減の拡大は命題であった。一方、京都市にとって、温室効果ガス削減の柱として旗揚げしたBDF事業に原料の確保が必須であった。

1997年8月、立ち上がったばかりの下鴨・松ヶ崎地域ごみ減の回収拠点5ヶ所にドラム缶が据えられる。市民たちが持ち寄った使用済てんぷら油は、その後、民間業者により精製され、BDFとしてごみ収集車や市バスを走らせた。この日のモデル事業を経て、使用済てんぷら油の回収が本格化する。

地域ごみ減と活動を共にするのは、自治会、女性会、保健協議会、さらに、ごみ減量推進員研修を修了した人で構成する「めぐるくん推進友の会」など。資源循環のかたちを自らの力で具現化するてんぷら油の回収事業は、地域ごみ減の立ち上げを促した。古紙・牛乳紙パックの回収などを行い、現在では京都市の全区199団体が日々、ごみ減量に取り組んでいる。

取材協力：山内寛地域活動実行委員会委員長

森田知都子（平成28年2月15日取材）



\*BDF：バイオディーゼル燃料（Bio Diesel Fuel）は、軽油の代わりにディーゼルエンジンの燃料に使われる植物由来の燃料油。いわゆるカーボンニュートラルであり、走行燃費がよく、CO<sub>2</sub>排出量も低い。京都市は2004年8月独自にプラントを開設し、本格的に事業化した。

## 地域住民が環境意識に目覚め自主的に活動

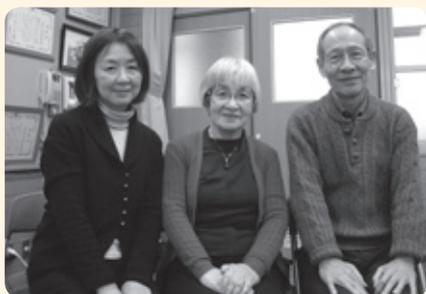
### 行政との協働事業にも積極的に参画

名だたる観光スポット銀閣寺の北、比叡山麓一帯に広がる京都市の東部、北白川。芸術大学もあり、白川通りにはカフェも並ぶ開放的な雰囲気この地で、北白川ごみ減量推進会議（以下、北白川ごみ減）は平成18年（2006）に立ち上がった。現在は、保健協議会が主体となり取組を進めている。

さらに、他の地域団体とも連携を広め、平成27年11月には京都市のエコ学区宣言を行った。

### 地域全体で環境に取り組む姿勢

使用済てんぶら油の回収拠点7ヶ所でのスタートをきっかけに、地域の夏祭りや伝統文化行事の中で、さまざまな資源物の回収やごみ減量の啓発活動を左京エコまちステーションと協働で行ってきた。地域住民のニーズにあわせて資源物等の回収を行う一方で、新たな取組にも積極的に参画している。



北白川ごみ減の核として動くメンバー  
左より岩井早千子副会長、山崎陽子会長、西村幸雄副会長

京都市ごみ減量推進会議では、平成25年度から地域ごみ減量推進会議を対象に、『ごみ減量推進講座事業』を実施している。ごみの計量は即効果が現れる減量策といわれており、ごみについて学びつつ、各家庭の排出量をはかり、減量を進めるため、27年度の本事業に、北白川ごみ減では17世帯が取り組んだ。

参加者は、昨年11月、ごみのはかり方の説明を受け、14日間各家庭でごみの計量を実施した。翌12月には、学習会にて、ごみを減らす方法を学んだ。具体例も交えたお話に、ごみ減量の意義を確認し、気力を高めあう事ができたようだ。この学習会でごみ減量取組宣言を行い、さらに14日間、ごみを計量し、効果を確認した。

### 365グラムが200グラムに多くが減量を実現

1月23日粉雪が舞う日の午後、北白川小学校内の2階、ふれあいサロンでは、計量を続けた北白川ごみ減のメン

バー12名が集っていた。各自の取組を語り合う「ふりかえりの会」である。

山崎会長の挨拶の後、ごみ記録計算タイム。一年で最もごみが増える12月を含めての計量とあって、5名が減量、3名は増量という結果に。

続いて、一人ひとりの報告。「食材のまとめ買いやハダカ売りの品物を購入し減量」「雑がみを資源にまわした」なかには「冷蔵庫の整理を工夫、賞味期限の近い物を前に置くなどした」「野菜の芯も千切りにして食べる」などなど、続々工夫が飛び交った。多かったのが「プラスチックの分別」「雑がみの分別」の徹底による効果。一日365グラムだったのが200グラムに下がった人、毎回45リットルのごみ袋で出していたのが30リットルの袋になった人もいた。

京都市のデータでは、一人一日ごみ排出量は平均428グラム（平成26年度実績）。計量が、ごみ減量の有効な手段であると納得した。



円陣を組み、成果を分かちあう



計量の様子

### 学生や外国人へのマナーの徹底が課題

約5千世帯が居住する北白川学区。環境への高い意識が根づく地域だが、ごみ問題がないわけではない。白川疏水辺りでの不法投棄や、急速に増える旅行者によるマナー違反など、土地柄特有の問題は避けようもない。「エコまちステーションとの連携で解決できれば」と、山崎陽子会長は思いを語る。

北白川ごみ減は、「左京ふれあいecoフェスタ」（3月13日開催）でも行政と協働で取り組む。前向きな姿勢が問題解決の道を切り開くにちがいない。

森田知都子（平成28年1月23日取材）